

2 日本の染織技術の流れ



吉岡 幸雄
YOSHIOKA Sachio | 染織史家

日本人は四季の移ろいの中に色の美しさを見出し、繊細な色の世界を創出してきた。色の名前は植物などに結び付いたものが多いことから、自然の中から生み出されてきたことがよくわかる。時代時代が使われてきた色を見ながら、色の歴史について学ぶ。

染織技術の始まり

日本人が育んできた色彩の文化について、例えば弥生時代（紀元前3～3世紀）の中頃から今まで、2千年ほどの間のわずかな時間の流れを考察しても、「日本の色」というものは一言や二言で語りつくせない。

日本が世界のなかで先進していた国々の仲間入りをしたと思われる6～8世紀は、シルクロード文化の成熟期であった。平安時代（794～1185年）のはじめに編纂された『延喜式』に記された染色材料などの記述を解説し、かつ法隆寺や正倉院に今日までに残された染織品の数々を見ていくと、日本の染織技術は奈良時代（710～794年）に染織方法がほぼ完成し、それから約1世紀半を経た後もそのまま維持されていたことが理解でき



写真1 『延喜式』。律令法の施行細目を集成したもので、延喜5（905）年から編纂がはじめられた。全50巻の内、巻14「縫殿寮」は、当時の衣服裁縫を司る役所に関する記載であり、その中の「雑染用度」の項には30種類の色名と、それを染め出すための植物染料、その他の材料が列記されている

る。それはまた、中国はもとより、世界の文明の発達した地と比較しても、遜色のないものである。王朝の貴族たちはそうした技術を背景に、美しい彩りの衣装を身に纏って、日々の生活を送っていたことになる。

色の名前

色の名前のつけ方にも、大きなうねりがやってきた。奈良時代から平安時代初期の、たとえば「正倉院文書」や『延喜式』のような文献から色名を見てみると、冠位の紫、青、赤、黄、白、黒といった直接的な表現や紅、刈安、胡桃、椽、蘇芳といった染色の材料であらわしたものが多く、桃花褐などが植物の花の色をあらわしている程度である。

ところが『古今和歌集』を見ると、春には「さくら色に衣はふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに」（紀有朋）と桜の花を、秋には「竜田川紅葉乱れてながるめりわたらば錦中やたえなむ」（よみ人しらず）と紅葉が散る竜田川の情景を錦ととらえるように、四季それぞれに咲き競う植物の花の彩りや、野山の草樹の移り変わりをなぞらえる色名が多く登場してくる。

かな文字が発明され、31文字の和歌が詠まれ、物語や随筆がつぎつぎと著されたこと背景となったのは、自然界の日々刻々と移ろいゆく草樹花の色彩であり、それらをどのように歌や文に表現し、さらには衣装、手紙などに取り入れていくか、ということに人々の心が注がれたからであろう。



写真2 『源氏物語』「若菜上」桜の細長。吉岡幸雄が制作した『源氏物語』「若菜上」で女三の宮が着ていた衣装。平安時代の女性には現代の着物の原形である直線裁ちの衣装を何枚もかさねて着用していた。この組み合わせにより季節感を表わした

配色の妙

『延喜式』に見られる染織技法を背景に平安時代の色彩を見る場合、それらがもっとも顕著にあらわれているのは、女性のかさねの衣装である。それまでは、正倉院に残された衣装や絵画などから見ると、やや曲線裁ちの入った衣服であったようだが、平安京に都が遷されてから100年ほどの間に、現在の着物の原形である直線裁ちのかたちが整えられていった。とりわけ、貴族の女性たちは美しく着飾ることに心を砕き、俗に十二単といわれる女房装束のように、何枚もの衣装を重ね着して晴れやかなものとした。

数領着重ねた衣装の、襟元、袖口、裾などにあらわれる、流れるような色の調和、一領の衣の「ふき（裾、袖口などの裏地が少し見える部分）」にわずかにのぞく表と裏の色の対比、上に薄く透き通るような経糸をからみあわせるもじり織の羅・紗・絹の織物、精練（灰汁などで煮てやわらかくすること）していない生絹の平絹などの薄絹をかさね、光の透過であらわれる微妙な色調を、季節ごとに咲き競う花の彩りや木の葉の色合いなどになぞらえて楽しんだのである。このような配色の妙が、いわゆるかさねの色目といわれるものである。装束はいうまでもなく、染め紙を用いる懐紙や料紙、室内の間仕切りとなる几帳や御簾などの調度品にも用いられたのである。



写真3 「紫根」。紫草の根の部分。紫草は白い花をつけるが、根に紫の色素を持ち、それを用いて紫に染める

武士の好んだ色

次の政治を担う武士にとっては戦場こそ彼らの晴れの場であり、戦いの場に着用する装束、つまり甲冑という衣装が重要だった。甲冑は刀から身を守り、矢をはじく役割をする実用的なものでありながら、戦場という晴舞台に、自らの存在を誇示するように華麗な色と文様がこらされていたのである。それは平安時代末期に編まれた『梁塵秘抄』にある次の歌にあらわれている。「武者の好む物、紺よ紅山吹濃き蘇芳、茜寄生の摺、良き弓胡縁馬鞍大刀腰刀鎧冑に、腋楯籠手具して」。

この有名な一節は当時の風俗を解説するのによく引用されるが、「山吹濃き蘇芳」の注釈には、山吹と黒味をおびた濃い蘇芳の赤と考えられることが多いが、私は「濃き」のあとには「紫」が略されていて、濃き紫、そして蘇芳の木の芯材で染めた赤と考えている。それは、今日に残された遺品のなかに、もっとも高位とされた紫草の根で染めた紫の威などがいくつもあって、質実剛健を旨としていた武将たちも、甲冑には派手で華やかな装いをこらしていたことがうかがえるからである。

紫を愛した秀吉

豊臣秀吉が政権を担う時代に入ると、日本各地で金山銀山の採掘が盛んになり、絢爛豪華を極める支配者のもと、国全体が贅沢になったことから、紫根染や紅花染などの困難な植物染の技法も息を吹きかえした。

秀吉は紫を愛した武将で、肩の部分には濃い紫地に

桐紋を絞り、胴の部分には鶺鴒色、浅葱、紫を用い、裾には濃い緑の矢の形をあらわした華やかな辻が花染の胴服を、戦いに必要な特別な馬を献上した礼として、南部藩の南部信直にあたえている。これにも紫草の根がふんだんに使われている。それがきっかけになったかは定かではないが、江戸時代に入って盛岡と秋田県の花輪あたりで紫草が多く採れ、南部藩では紫根染を特産物として振興するようになり、江戸まで送られるようになった。

このような赤系の紫を好む武将たちの姿は、その当時南蛮船に乗ってやってきたポルトガルやスペインの人々の眼にも印象的に映ったのであろう。天正5(1577)年に来日したイエズス会のポルトガル人ジョアン・ロドリゲスは、武将好みの衣装について次のように記している。

「衣類の布地の表は、それが絹であろうと木綿あるいは亜麻の布製であろうと、いろいろな色をした花が優美に描かれているのが普通である。もっとも絹物のなか

には縞模様のももあり、また一色のものもあり、二色のものもある。絹の衣類でも他の材料でもそれらの材料に模様を描くことにおいて、日本人は偉大な職人であって、いろいろな描き方をした花の間に金糸を縫いこむ。彼らは緋色を使うことにすぐれており、さらに赤紫色をつかうことでひとときわ優れている」(『日本教会史』第16章、大航海叢書IX)。

多彩な衣装を持つ謙信

また、染織史上で特筆しなければならない戦国武将の一人は上杉謙信であろう。現在、山形県米沢市の上杉神社に伝えられる謙信所用とされる衣装の数の多さ、豪華さ、染織技法の多様性が多くの識者を魅了するのである。

まず「金銀襷緞子縫合胴服」は、中国より舶載された輝くような金襷や緞子などを、文字通り縫い合わせた(今風にいえばパッチワークとでもいうような)もので、その斬新な試みに感服させられた。マントはおそらくポルトガルかスペインの船が運んできたものであろう。ヨーロッパ製のピロードで、南蛮屏風に描かれた南蛮人が着ている姿そのもので、彼らから譲り受けたものかと思われる。そして羅紗の胴服。袖は緋色、見頃は濃紺

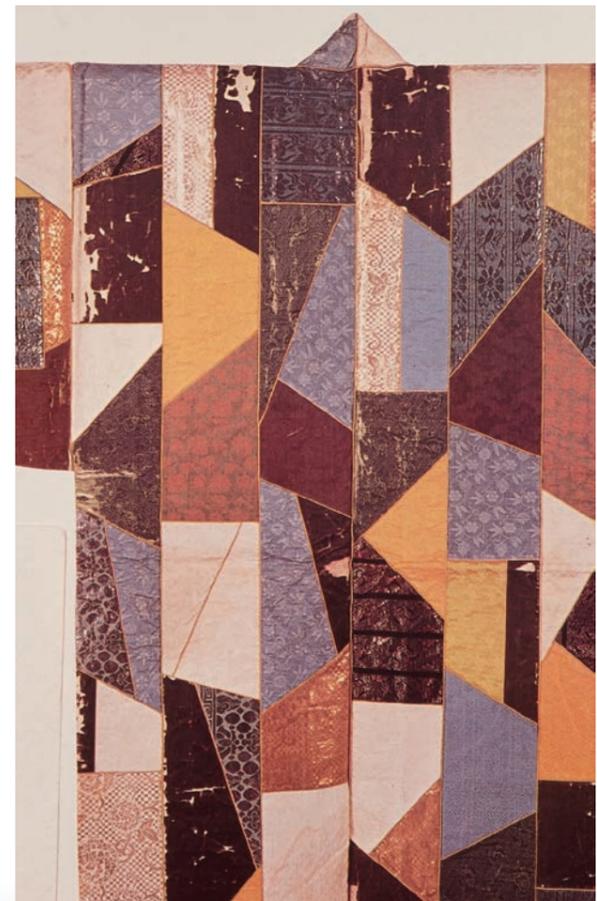


写真4 上杉謙信所用「金銀襷緞子縫合胴服」。中国から舶載された輝くような金襷や緞子などを縫い合わせたもの



写真5 上杉謙信所用「袖替り陣羽織」。南蛮船により招来された貴重な羅紗で仕立てられたもので、袖と身頃の色を変えた斬新なデザインである

地を対照的に用いて、その縫い目の縁取りは、ペルシャ製のモールで伏繡がほどこされ、裏地には中国製の緑地菊唐草文様の緞子をつけている。まさに南蛮と中国を混交した衣装である。

この緋色は、それまで日本人が眼にしたことのない猩々緋というスペイン製の羅紗であった。『日葡辞書』には「臙脂色または深紅色の織物」とある。猩々とは中国における想像上の霊獣で、その血で染めた色という珍説もあるが、実際には虫から採った染料で染めている。臙脂虫の一種で、地中海あたりに生育する樫の木に付くケルメスという虫で染めたといわれている。ただしスペインはこのときすでに中南米に進出して、そこにあるもうひとつの臙脂虫、サボテンにつくコチニールを自国へ運んでおり、これで染めた可能性もある。

その他、胴服の類では、表は真っ白の綸子に裏は真赤な紅花染の無地、襟には紅、緑、黄の三色の色糸で織られた唐織を配したものなどもあり、まことに多彩な衣装の持ち主である。

謙信がどうしてこのような衣装を持ち得たのかには、多少の疑問がのこる。私はこの上杉家に伝わる衣装類は、全てが謙信のものではなく、いくつかはその養子上杉景勝の所用ではないかと推測している。時代が前後するが、天正15(1587)年、大坂城において秀吉と接見した景勝は「白銀五百枚と越後布三百反を贈った」とある。越後布とは越後名産の上質の麻布であろう。それに応じて秀吉は宴席を設け、自ら所用する胴服を贈って親しみの情をあらわしたという記録があるからである。さらに桃山時代になって一段と興隆した京都の高級な小袖屋や呉服商は、公家や金持ちの町方、そして京都に入洛する武将たちの注文だけでなく、特別な許可をもらっては遠く越後、甲府、駿府など有力武士が城を築く街へ出掛けて、武具甲冑とともに衣装の注文を受けてきていた。彼らの手で、遠隔の地に運ばれたものもあったと考えてよいだろう。

豪華絢爛な家康

さらに、徳川家康の着用していた衣装の豪華さについては、その膨大な遺品がつぶさに物語っている。それらは將軍家に伝わるもの、日光東照宮、静岡の久能山東照宮など家康を祀る神社に奉納されたもの、そして徳川の御三家として知られるように、家康の第9番目の



写真6 「山道に丁子文様胴服」。石見銀山の見立て師安原伝兵衛が徳川家康より拝領したものである。紫根、紅花、刈安の染料を使った辻が花の技法で、三段の鋸歯文段の間に大小の丁子を散らした文様で、非常に精巧である

子供である尾張義直、第10子の紀州頼宣、第11子の水戸頼房に分割して贈与された、「御駿府御道具分け」などの衣装には辻が花小袖など豪華絢爛なものが多数あり、数えるのが煩わしいほどである。

そのなかで一つあげてみると、石見銀山の見立て師安原伝兵衛が拝領した「山道に丁子文様胴服」があって、これは紫根、紅花、刈安の染料を使って、精巧な絞染をほどこした辻が花で、私のような染屋から見ても想像を絶するような手間と時間がかかっており、優れた職人達、澄んだ色が出る高価な染料などをよくぞ集めた、と感嘆させられるものである。

古の美を尊ぶ

このように、日本の色の流れは見事な美しさを表わしながら脈々と続いてきたが、明治維新を前後してヨーロッパで発明された化学染料が輸入され、その流れは曲折していった。私は伝統ある植物染を専らとしているので、その人工的染料や染めの方法は好まないため、これ以上の論を避けたいと思う。「温故知新」古の美を尊ぶのが私の信条である。